

【書評】

英語教師のための基本文献案内 (6)

加島 巧・川島 浩勝・藤内 則光
原田 依子・藤原 和政

The Selected Bibliographical Guide for Teachers of English (6)

KASHIMA Takumi, KAWASHIMA Hirokatsu
FUJIUCHI Norimitsu, HARADA Yoriko
FUJIWARA Kazumasa

Abstract

In what follows we offer the sixth bibliographical guide of five basic books for teachers of English. The first book is selected from Children's Literature, which is the winner of the Newbery Medal. The second one is selected from the field of pedagogy, especially from phonology. The third and fourth ones are chosen from English linguistics and the theory of language acquisition. The fifth one belongs to the psychology dealing with bullying issues.

1. 『*Holes*』 KASHIMA Takumi
2. 『英語音声教育実践と音声学・音韻論 効果的で豊かな発音の学びを目指して』
..... KAWASHIMA Hirokatsu
3. 『*Lectures on Government and Binding*』 FUJIUCHI Norimitsu
4. 『ことばの発達の謎を解く』 HARADA Yoriko
5. 『『組織で支え合う！学級担任のいじめ対策』』 FUJIWARA Kazumasa

序

将来英語教師を目指す学生や、現役の英語教師にとって有益な書物を一点ずる紹介する基本文献案内も6回目を迎えることとなった。まず、英語文学の分野からは、優れた児童文学書に与えられるニューベリー賞を受賞した*Holes*、2冊目は、英語教育の分野ではあるが、心理学の側面も含んでいる。3冊目と4冊目の2冊は、言語学、英語学の領域の基本文献と言える。5冊目は、心理学の領域から選んだ。

1. Louis Sachar : *Holes* 出版社: Yearling 272ページ2000年 ISBN-10: 0440414806
(『穴』講談社文庫 平成18年 幸田敦子 訳 ISBN-10: 4062755874)

アメリカ児童文学から、ルイス・サッカー (Louis Sachar) (1954 -) が1998年に書いた*Holes*を紹介する。この本は、1999年にニューベリー賞を受賞した作品である。日本でも幅広い年齢層に読まれていると思う。翻訳もあり、2003年には映画化もされた。(日本では劇場未公開)

この本は、大学での講読の授業でも使ったし、教員免許状更新講習会の際にも使った。卒論のテーマをこの本から見つけ出し、「*Holes*で読むアメリカの諸相」といったテーマで卒論を書く学生もいたのだが、自分がなぜこの本に興味を持ったのか。そのきっかけとなったのは、アメリカのコミュニティカレッジに留学していた学生からの一通のメールであった。ルイス・サッカーの*Holes*を授業で読んでいるとの連絡があったので、児童文学をアメリカでどう教えているのかを問い合わせた。届いた返事を以下にまとめる。メールの最後には、*Holes*は読みやすく、面白かったと書いてあった。

1. 毎回10チャプター読むことが授業前の予習として課せられる。(Holesは全50章)
2. 2週間に1回テキストの内容についての小テストがある。
3. 半分ほど読み進んだところで主人公スタンリー・イェルナッツ (Stanley Yelnats IV) の精神、肉体的に説明している部分を pick up してレポートを書く。
4. 全体の plot chart を作りレポートを作成する。
5. *Holes* から読み取れる情報 (たとえば、Jim Crow Law, たまねぎ売りの男のサム、脱水症状など) を一つ選び、選んだ topic に関連する情報を新聞などから二つ探し、エッセイを書く。(その際、次の三点に注意して書く。1. Summary of Information, 2. How Your Topic Is Related to *Holes*, 3. Personal Response to the Topic)
6. 映画化されたものを見て、本と映画の相違点をレポートする。

そこで、こちらもしっかりと読み始めた訳である。するとするとどうしたことか、児童文学と侮るなかれ、この小説が幅広い年齢層に読まれる理由が分かってきた。読めば読むほどこの小説に内在する魅力に魅せられる自分に気づくのだ。読者としては、それはそれは幸せな読書体験をすることとなるのである。

Holes の魅力は何なのか？それは、まず、物語の筋、構想がしっかりしていることであろう。そして、登場人物も魅力的である。

主人公スタンリー・イェルナッツ (Stanley Yelnats IV) はついてないのです。学校ではいじめられているのです。(Derrick Dunne という小柄な男の子にいじめられていると言っても、先生は信じてくれません。スタンリーはちょっと太りすぎの男の子なのです。その所為で、数学の Bell 先生にも教室で恥ずかしい目にあわされます。) でも、明るいのです。お父さん (Stanley Yelnats III) は発明家です。発明家には、「1. 頭のよさ 2. 根気 3. ちょびっとの幸運」の3つが必要なのですが、一つ欠けているので、実験も上手くいきません。おじいさん (Stanley Yelnats II) も一緒に住んでいます。代々息子には Stanley Yelnats (前から読んでも、後ろから読んでも同じという palindrome という言葉遊び。) という名前がつけられるのです。この3人は、には、もう一つ共通点があります。希望を失わないことです。不都合なことがあると、3人は「あんぼんたんのへっほこりんの豚泥棒のひいひいじいさん (主人公から見て)」の所為にするのです。(この豚泥棒のひいひいじいさんは、ヨーロッパのラトビアからの移民です。ラトビアでマダム・ゼローニに呪いをかけられます。) お母さんは、そんな時に、初代のスタンリー・イェルナッツは負け犬ではないと力説するのです。ひいじいさんは、「あなたにキスのケイト・バーロー」に全財産を奪われたのですが、、、、。そのスタン

リー・イエルナッツは学校でいじめにあっています。警察に逮捕された日も奪われたノートを取り戻そうとしたばかりにスクール・バスに乗り遅れてしまいました。学校から歩いて帰る途中に、スニーカーを盗んだ罪で逮捕され、グリーン・レイク少年矯正キャンプに送られたのです。そこでは、毎日直径1.5メートル、深さ1.5メートルの穴を一個掘ることが課せられるのでした。スタンリーはDテントに所属することになります。そこで色々な経験することになります。なにせ、このCampに送られてくる少年達は、一癖も二癖もあるのであります。(以上8章までの概略)

110年前にラトビアからアメリカに渡った祖先、Elya Yelnatsから現在までに亘る親子五代の物語、そこに複雑に絡み合う人物。Holesを書き終えるのに、1年半ほどかかったと作家は言っているが、一番難しかったことは、物語を通し、色々な要素をどうレイアウトするかであったらしい。主人公スタンリーの物語を邪魔することなく、例えばKate BarlowやElya Yelnatsとその息子の物語の配置など。しかし、それは、ものの見事に解決していることが分かる。是非一読を。

この本に描かれている人物の歴史をアメリカの歴史と並べてみると、興味ある事柄が浮かび上がるのではないだろうか。文学として鑑賞する以外にも、他教科との連携で理解を深めることができると思われる。自分自身は、アメリカの公民権運動について理解を深めることが出来たし、大統領がオバマからトランプに代わってから急に目立ち始めた白人至上主義を理解する際にも、1863年に奴隷解放宣言が行われてから公民権法が成立する1964年7月2日までの歴史にも思いを馳せることで現在のアメリカを理解することが出来るのではなかろうか。

ニューベリー賞受賞作品であることは先に述べた通りだが、この文学賞は1922年にアメリカ図書館協会によって創設された世界で税所の児童文学賞である。「児童文学の父」と言われる18世紀イギリスの著述家・出版家のジョン・ニューベリー (John Newbery 1713-1764) にちなん名付けられたこの賞は、アメリカで出版された児童書の中で、もっともすぐれたものに対し年に一度贈られる。1943年に*Adam of the Road* (『旅の子アダム』) で受賞したElizabeth Gray Vining (1902-1999) という女流作家をご存じだろうか。日本では「ヴァイニング夫人」として知られている。今上天皇が皇太子時代の1946年10月から1950年10月まで家庭教師をしていた人物である。(その時の経験は、*Windows for the Crown Prince* 『皇太子の窓』として出版されている。) 2002年にはリンダ・スー・パーク (Linda Sue Park 1960-) の*A Single Shard* (『モギー-小さな焼きもの師』) が選ばれた。物語の舞台は、12世紀後半の韓国、チュルポという町である。2011年のニューベリー賞佳作には、マーギ・プレウス (Margi Preus, her year of birth is unknown) の*Heart of a Samurai* (『ジョン万次郎 海を渡ったサムライ魂』) が選ばれた。かように作品の舞台と時代は多様なのだ。

ルイス・サッカーがHolesを書いたのは1998年である。無実の罪でCamp Green Lakeに送られた主人公スタンリー・イエルナッツ4世だが、最後には、5世代に亘ってかけられていた呪いも解け、めでたしめでたしという結末を迎える。しかし、Holesの別の登場人物の成長物語には続きがある。Camp Green Lakeでは先輩にあたるArmpit (「脇の下」、これ、あだ名です。) とX-Ray (「X線」、これもあだ名ですが、本名Rexをpig Latinを用いた言葉遊びであだ名を作り上げている。) を主人公としてルイス・サッカーは*Small Steps* (『歩く』) を書いた。最新作は、2015年に書いた*Fuzzy Mud* (『泥』) である。

さて、この稿を締めくくりにあたり問題を一つ。Theodore Johnson (Armpit)はCamp Green Lakeを出ると、同じテキサス州のサンアントニオ (San Antonio) にある更生施設に入り、その学校で勉強し、

カウンセリングも受けた。そして今はテキサス州オースティン (Austin) に居て、レインクリーク灌漑造園会社に時給7ドル65セントで雇われている。彼は、自分に五つの課題を課して日々を過ごしている。それは一体何なのか？

次の五つが答えなのだが、その通りになったのかどうかは是非 *Small Steps* を読んで頂きたい。しかし、Armpit (「脇の下」) って変なあだ名ですね。なぜこんなあだ名がついたのかも同書に書いてあるので、見逃してはだめですよ。

問の答：Theodore Johnson's five small steps.

1. Graduate from high school.
2. Get a job.
3. Save his money.
4. Avoid situations that might turn violent.
5. Lose the name Armpit.

○参考になるウェブサイト (すべて2018年9月9日閲覧)

作者ルイス・サッচারのHP

<http://www.louissachar.com/>

米国図書館協会の児童サービス部会 (ALSC) のHP

<http://www.ala.org/alsc/awardsgrants/bookmedia/newberymedal/newberymedal>

2. 有働真理子・谷明信 (編)：『英語音声教育実践と音声学・音韻論 効果的で豊かな発音の学びを目指して』国立大学法人兵庫教育大学教育実践学叢書4、出版社：ジヤース教育新社 251ページ 2018年 ISBN978-4-86371-455-7

本書は、音声学・音韻論・英語学・言語学・英語教育学を専門とする研究者と小学校・中学校・高等学校の現職教員による共同研究プロジェクト活動をベースに執筆されたものである。その研究スタンスは、次のようなものである (p.16)。

発音指導・教育の遅れを改善していく道のは平坦ではないが、英語教育に求められる対話能力育成に向けて、問題の所在を明らかにして、必要な手立てを講じる努力に取り組む努力の積み重ねが重要である。

小学校から大学レベルに至る英語発音教育が理論面と実践面から包括的に捉えられているが、特に、学校教育における知識と実践の関係性を意識しながら、体系的な英語発音指導法の開発が試みられている。下記は、本書全体を貫くバックボーン的なもので、共同研究プロジェクトで共有されていた「思い」である (p.4)。

音声学・音韻論の知識に基づいて楽しく発音練習でき、なおかつ成果の上がるような授業をしたい。

本書は、理論編と実践編の2部構成となっている。前半の理論編は、第1章「英語音声教育実践に必要な「知識」、第2章「音声学・音韻論と英語教育実践—対話能力を強化する英語指導実践に向けて—」、第3章「マザーグースの英語を音韻的にみる」、第4章「小学校段階における英語音声指導—「歌とチャンツ」に焦点を当てて—」の4つの章から構成され、それぞれの章において、学術的知見と教育実践の関係性というコンテキストで英語音声指導の諸相が考察されている。

第1章「英語音声教育実践に必要な「知識」は、英語音声教育実践に必要な文法知識・文法指導の位置づけを再考する必要があることを論じたものである。まず、言語学において音声学・音韻論が文法（統語論、意味論）と密接に関連していることは広く受け入れられていることであるが、学校英語教育においては、両者の関係性が問題になることは稀有で、発音指導方法の開発において大きな障害になっている、というような議論が展開されている。次に、文法指導と音声教育実践を繋ぐ音声学・音韻論の知識はどのようなものであるかが考察され、統語構造の違い（複合語か名詞句構造か）がアクセント付与の位置に反映されること（ENGLISH teacher<大文字部分の形容詞に強勢を置くことで「英語教師」の意味になる> vs. English TEACHER<大文字部分の名詞に強勢を置くことで「イギリス人の教師」の意味になる>）等が例として挙げられ、英語音声教育実践における文法的「知識」の重要性が論じられている。

第2章「音声学・音韻論と英語教育実践—対話能力を強化する英語指導実践に向けて—」は、前章での議論を踏まえたもので、英語指導実践に必要とされる音声学・音韻論に関する知識の精選を行い、さらに、学校英語教育で実際に使用されている教材や指導状況に関連付けながら解説を加えている。そのような「知識」は、1) 文のリズム、2) 弱形式、3) イントネーション、4) 音調、の観点から分かりやすく、コンパクトに纏められている。例えば、音調と構文に関して、低上昇調文（What are you doing ?）と高下降調文（What are you doing ?）が例文として挙げられているが、夕暮れ時にひとりで公園にいる子供に聞く場合は、やさしい口調の低上昇調がふさわしく、一方で、会社の廊下で不審な人物に語る場合であれば、高下降調を使うことになる、様な解説がなされている（p.78）。

第3章「マザーグースの英語を音韻的にみる」は、マザーグースの英語における音韻的特徴を踏まえ、マザーグースが英語のリズム学習に良い教材になり得ることを論じたものである。その論点を簡単に述べると、1) マザーグースの詩は、強音節のリズムに依拠しながらも、弱音節の数に幅がある点において、伝統的な英詩よりも話し言葉により近い、2) 話し言葉においては、様々な条件により、リズムがきれいに現われないことが多いが、マザーグースの詩はリズムカルであるため、話し言葉のリズムを練習する際、好都合な素材となり得る（p.98）、ということになる。実際には、内容語・機能語、句強勢・文強勢、頭韻・脚韻などの観点から、マザーグースの詩が細かく分析されているが、例えば、脚（foot）をユニットとする音の境界は文法的なユニットの境界は必ずしも一致しないこと（例：Twinkle, Twinkle, Little Starにおける“Like a / diamond / in the / sky /”等）や、また、音楽との関連で、マザーグースの詩のリズムが楽譜上ではどのように表記されているかが示され、言葉と音楽のリズムの関係が考察されている。

第4章「小学校段階における英語音声指導—「歌とチャンツ」に焦点を当てて—」は、英語音声指導の立場から歌とチャンツの位置づけを明確にしなが、歌やチャンツと密接に結びついている英語音声の特徴とその活用意義等を考察したものである。例えば、位置づけに関しては、外国語教授法の歴史を踏まえ、教授法としてのJazz Chantsに対する評価を行い、さらに、最新の研究成果で得られた

知見を基に、言語学習における音楽や歌の活用に対して理論的根拠を与えている。また、歌やチャントと密接に結びついている英語音声の特徴に関しては、1) 音素、2) 音節、3) アクセント・リズム、4) イントネーション、の観点から考察が行われ、例えば、1) の音素に関しては、次のような言語と音楽の関連性が指摘されている (p.123)。

歌唱時の発音では、音楽的に美しいとされる共鳴音、すなわち母音部分を損なわないように子音を発音することが重要であり、歌全体において、各発音の自然さやバランス、声や音自体の美しさ、音楽性などの各要素の兼ね合いが大切とされている。

以上が第I部の理論編であるが、第II部の実践編は、第5章「ICTツールを活用した小学校での音声指導—音声分析ソフトPraatを活用して—」、第6章「中学生のためのイントネーション指導」、第7章「音声現象の記号化と高校における英語発音指導」、第8章「多様な進路に応じた英語音声指導—センター試験受験者と非受験者それぞれの場合—」、第9章「発音練習におけるALTの役割を再考する (“Re-imagining the Role of Assistant Language Teachers in Pronunciation Practice”）」の5つの章から構成されている。ここでは、第5章と第6章に焦点を絞り、英語音声に関する知識を反映した現職教員による指導実践事例を紹介する。

第5章「ICTツールを活用した小学校での音声指導—音声分析ソフトPraatを活用して—」は、小学校5年生を対象としたICTに基づく実践研究を扱ったものである。例えば、1) 音声分析ソフトPraatのスクリーン上で“What is it?”のピッチ曲線を実際に見せることにより、“is”のピッチが高くなり、全体が「弱強弱」のリズムになっていることを明示的に理解させることができたこと (p.153) や、また、2) 日本人児童による“What’s this?”と“What is it?”における“What”に含まれる母音を比較すると、“What is it?”の第2フォルマントがより高い (p.156) などの結果が示され、短時間の発音指導と練習で児童達の発音が変化したとが報告されている。

第6章「中学生のためのイントネーション指導」は、イントネーションに重点をおいた授業実践を扱ったもので、1) イントネーションに関心をもてるような授業の考案、2) 授業実践、3) 生徒のやりとりについての会話分析、4) 中学校におけるイントネーション指導についての考察と提案、から構成されている。例えば、1) の授業考案に関しては、音声英語が文脈や話者の心的状態で変化することを学習者に気づかせることの重要性や、また、教科書の平坦読みを改善するための工夫 (イントネーションのパターンが視覚的にわかるようにすること等) が述べられている。また、3) の会話分析に関しては、記録された生徒の音声データおよび映像データを用い、教室内における生徒達の英語イントネーションに対する取り組みが質的に記述・分析されている。下記は、その記述例である (p.176)。なお、Sは生徒で、数字の56は会話分析スクリプトの番号 (56番目) である。

あれほど役になりきれなかったS2が極めて自然にイントネーションをつけたセリフ回しを行っているのである (56)。このところから、個人の上達が周囲に与える好影響と、相互作用をもたらすグループ活動の重要性が理解できる。

本書は、日本の英語教育において遅れていると言われている音声指導の領域に対して果敢に挑戦し

たものであるが、理論面と実践面の融合が高い次元で試みられている。随所に、発音の学びという言語教育における基本的なことが、英語教育の言語学的知識の基盤に密接に関連していることが示されている。英語音声指導の本質に迫る一冊で、その重要性とポテンシャルを実感するであろう。

3. Noam Chomsky : *Lectures on Government and Binding The Pisa Lectures*

出版社 : Mouton De Gruyter 1993年 ISBN 978-3-11-014131-3

本書は Scuola Normale Superiore di Pisa で1979年に開かれた GLOW (Generative Linguistics in the Old World) での講演を中心にまとめられたもので、原理と媒介変項のアプローチによる生成文法、一般的には統率束縛理論または GB 理論として知られる生成文法の枠組みを定めた重要な専門書である。生成文法を専門とする研究者で本書を読破し理解していないものは存在しない。本当の意味での理論言語学は、この記念碑的な一冊から始まった。

本書の概要

教職志望の学生が大学の英語学の授業で触れる文法理論は Chomsky (1965) *Aspects of the Theory of Syntax* に基づく生成文法の標準理論であることが一般的であろう。この理論では、語彙目録と句構造規則からなる基底部が D 構造を生成し、変形規則の体系によってそれが S 構造に派生され、インターフェース部門である LF と PF に分化していく。この理論の枠組みであっても

- a. This is the book which I bought [e] yesterday.
- b. I persuaded John [[e] to tell me the truth.]
- c. John seems [[e] to be interested in Japan.]

の3つの文にそれぞれ空所があることは理解が出来ると思われるが、(1a)で関係代名詞が空所の位置から移動することは wh 移動変形規則で説明できても、(1b)と(1c)を NP 繰り上げ変形規則で説明することには困難があると思われる。(1b)で John や I が [e] から繰り上がることを阻止すること、(1c)では John の基底位置が seems の主語ではないことの説明が標準理論では困難である。

もしそれ以上の説明能力を求めるために GB 理論以降を研究することがあるとすれば大学院での研究となり、そのころには GB 理論ではなく極小主義を研究すると思われるが、当然のこととして最新理論を研究する際は理論の進化の歴史も研究する必要がある。なお、GB 理論の一つ手前として、句構造規則から X-bar 理論への転換、D 構造だけではなく S 構造も意味の投射に影響することを説明する痕跡理論や格フィルター、空範疇の概念の導入を含む改定拡大標準理論を研究する必要もある。

先行研究

本書が標準理論と大きく異なることは、形式的な標準理論は Chomsky (1965) 一冊を読破すれば一定の理解を得られることに対し、本書では既に先行研究、特に Pisa Lecture の後で出た Chomsky (1980) "On Binding" の理解が前提となっており、後半部分にて詳しい解説を行うと述べる下位理論による説明が前半部分のメインで、本書の後半部分を読んでから二度読みをするか、英語学もしくは理論言語学の

事典を頼りにしながら読み進める必要がある難解な書であることである。本書でCore grammarと呼ばれる仕組みも標準理論から大きく変化している。改定拡大標準理論で含まれた追加を含めると、概略以下のようなになる。

Core grammar の各部門	標準理論	GB 理論
基底部	語彙目録と句構造規則 D 構造を生成	語彙目録と X-bar 理論 D 構造を生成
変形部	変形規則	α 移動と下位理論 境界理論、統率理論、 θ 理論、束縛理論、格理論、コントロール理論 文法原理 投射原理、完全解釈の原理、許可の原理
インターフェース部門	PF 部門と LF 部門	PF 部門と LF 部門

この時点での構造派生はD構造より始まるが、句構造規則はX-bar理論に置き換わる。X-bar理論は投射原理により外心構造を生成しないが、本書の時点で節はINFLの投射範疇である可能性がほのめかされている。以前は変形規則一つだった派生部門はモジュール化された各下位理論の集合となっており、本書の後でも個別には研究が進み、境界理論は障壁理論に進化するとともに、局所的最小性の概念が派生の経済性や極小主義への研究につながっている。

GB理論の研究と理解にはこれらの下位理論の研究が必要であるが、GB理論で特に重要なのは形式面としては構成素統御、抽象的な側面としては空範疇の理解である。おそらく本書で最も多く説明されているのは、NP痕跡とコントロールPROの違いの説明であろう。

理論の要点

本書で最も強調されているのは、形式的には表示されない抽象概念、空範疇や範疇素性、格や θ 役割の付与、先行詞との同一指標付与などが、いかにして構成素統御(c-command)によって動機づけられるかの議論である。構成素統御関係はコーパス言語学における統語解析の際に記述に使われることもある概念で、誤解を恐れずに最も簡潔に記述すれば

範疇aと姉妹関係にある範疇bを共に支配する節点a'があれば、範疇aは節点a'に支配される範疇b以下のすべての節点を構成素統御する

である。c-commandと区別されている理由は、本書の段階では範疇aを支配する最初の最大投射範疇aPに支配される指定部と補部を範疇aはm-commandするという別の統御もあり、m-commandの方は当時格付与を支配する概念であったためである。その後SPEC-Head agreementのような照合が提案されるようになり捨てられた概念ではあるが、c-commandはその後にも構造の形式的記述に使われ続けている。

空範疇とは構造の中に見られる空所のことであるが、見えないものが存在することをどのように正

当化するかが当時のそして今の生成文法の議論である。例えば α 移動によって範疇が移動すると移動元に痕跡が残るが、それは先行詞と同一指標を付与され c-command される、つまり束縛される必要がある。NP 移動と wh 移動では移動元で格や θ 役割の付与に違いがあり、NP 痕跡は照応形として wh 痕跡は変項として定義されるが、同じように移動によって連鎖を形成するそれら二例の構造的適格性も c-command で説明される。不定詞の主語の位置のようにそこから何も動くようには見えない空範疇も、統率されてはならないという原理に縛られる。

本書には樹形図による構造記述が少なく、構成素統御関係を正確に理解するのは初学者には困難が伴う。しかしながら構成素統御が分からなければ何もわからないのと同然なので、ここは参考書を引っ張りつけてでも理解が必要である。

その他にも、以前は記述的に述べていた条件が、理論の進化により理論的に説明できるようになっている。以前の理論では wh 島の条件、主格島の条件、指定主語島の条件など、要素の取り出し等の条件としていろいろな島の条件が記述的に提案されていたが、それらは本書の段階の理論では境界理論によって下接の条件の違反具合による解釈許容度の低下によって、もしくは束縛原理や空範疇原理の違反によって説明されている。wh 島の条件は例えば

[What_i [do you wonder [when [John ate t_i]]]?]

のような wh 句を跨ぐ移動が認められないもので、what_i の接近可能な最初の移動先が when によって占められているためそれを跨いだ場合、下接の条件に反している。

主格島の条件とは一般的に「主格の位置にある照応形は自由であってはならない」という条件で、

*John_i expected [that himself_i would win.]

*John_i seemed [that t_i would win.]

主格の位置にある照応形が語彙的な照応形の場合は束縛原理 A の違反、それが NP 痕跡の場合は空範疇原理違反となる。学校英文法的に説明が困難であるこれらの例文が不適格であることの説明として、より説明的妥当性の高い GB 理論を研究することは興味深いと思われる。

従前の理論の限界

以下に再掲するが、すでに紹介した例文

b. I persuaded John [[e] to tell me the truth.]

c. John seems [[e] to be interested in Japan.]

は、従前の理論では説明の必要がないか説明が出来ない。例文 b では、標準理論では不定詞の主語は語彙挿入されない空所のみで説明が必要なかった。この位置から I や John が繰り上げ移動しないことは、persuade の厳密下位範疇化素性を [__ NP S] と仮定すれば説明できようが、空所の説明にはなっていない。これは完全解釈の原理に反する。例文 c も、seems の本来の主語は [John to be interested in

Japan]であり、それが右方移動で[e] seems [John to be interested in Japan]が派生され、そこからJohnがさらに移動する変形を仮定できるが、前述の右方移動が繰り上げであればJohnは繰り下げ、Johnを繰り上げるのであれば[John to be interested in Japan]が繰り下げとなるだけでなく、痕跡が消去される二重の理論的不備がある。

この文法現象は、GB理論であれば例文bでは統率されない[e]の位置にコントロールPROを置きJohnをコントローラーとすることで説明できる。例文cも、seemsの主語の位置は格位置ではあるが θ 位置ではなく、空所の位置は格位置ではないが θ 位置ではあるので、 a 移動して連鎖として θ 基準と格フィルターを満たすと説明ができる。問題はこの説明は高等学校では、ましてや中学校でも行えないことであるが、今の生徒の理解を超える説明ならできると一言言えることが、英語の研究者でもある教諭として生徒の支持を得ることにつながるのではないかと考える。

参考文献

Chomsky(1957), Syntactic Structures, Mouton de Gruyter

Chomsky(1965), Aspects of the Theory of Syntax, MIT

Chomsky(1970), "Remarks of nominalization", in Jacobs and Rosenbaum (eds.)(1973), 232-86

Chomsky(1980b), "On binding," Linguistic Inquiry 11, 1-46

4. 今井むつみ著：『ことばの発達の謎を解く』

出版社：筑摩書房 239ページ 2013年 ISBN-10: 4480688935

本書は、認知科学を専門にする著者が、幼児の言語獲得について一般向けに書いたものである。しかし、獲得のみに焦点が置かれているわけではなく、本書の内容が子供の言語獲得に関する実験結果を通して、人間の認知メカニズムの形成や知的能力の発達を説明しようとする試みの一部であり、言語獲得の過程で人間が思考能力をどのように身につけていくか、また人間の知性とは何かについて考察している。また、私たちが普段、当たり前に使っている言葉が、いかに複雑なものであり、私たちにとってあまりに身近であるゆえに、気づかない点が多いことを鋭く指摘している点で、一般向けに書かれたものではあるが、言語を専門に扱うものにとっても興味深い内容になっている。

今回、本書を選んだ理由は、言語を獲得することはどのような知識・技能を身につけることを意味するのかに関するひとつのヒントを与えてくれると同時に、また言語獲得という文系的な問題を実験という理系的な手段でどこまで明らかにすることができるかを考えるきっかけを与えてくれる良書であると思ったためである。

日本人は [l] [r] の区別が難しいという事実はよく知られているが、その理由は既に母語である日本語の音素体系を獲得してしまっており、日本語の音素体系の中で区別されない言語音の物理的な違いには、注意を向けなくなる結果、区別が難しくなるとされている。従って、母語の獲得過程にある幼児期は、大人よりも人の発音器官が作り出す物理的な音の違いに非常に敏感に気づくとされている。

赤ちゃんは成長と共に多くの単語を耳にするが、ただ聞いているだけではなく、耳に入る言語音の中に共通性がないかを探し（これを無意識にしているという点が驚きであるが）、同時にある音の塊が

どれくらい頻繁に出てくるか、ある音の次にはどのような音が来る傾向があるかを、検出しているそうである。そこで、新しい言葉を聞いた時には、その音のつながりをもとに、自分が覚えている音と新しい音の類似性を見つけ、自分の頭の中にある言語音の知識と関連付けて記憶していくそうである。またそこから、その音のつながりをもとに、単なる言語音を単語として認識するようになる。つまり、前提となる知識が全くない状態から、言語音を分析し、その傾向の中から単語を見つけ出す、という作業を行っていることになる。人間が発する言語自体は線状的なものであり、特に音声として発せられる場合は単語の区切りは明確に示されるわけではない。それにもかかわらず、聞こえてくる言語音をもとに、分析をして、単語を見つけ出している（正しく単語を見つけられるようになるには、試行錯誤の時期があるそうだが）ことから、幼児期から人間が高度に知的な活動をしていることが理解できる。

そのように、音のつながりから、単語を探し出し、単語を記憶していくが、その過程でも様々な知的活動が行われていることが明らかにされている。具体的には、単語を手掛かりに自分が覚えた単語との類似性を見つけ出そうとする傾向があることが明らかになっている。対象物に類似性が見られる場合、それを同じカテゴリーとして認識する。本書では、三日月、満月、クロワッサン、丸い壁時計、半分に切ったグレープフルーツ、輪切りのレモン、牛の角、さやえんどうを「おつきさま」と呼んでいた例が紹介されている。

しかし、例えばミルクの入ったコップを指さして、お母さんが「これがコップよ」といった場合、まだ最初の段階では、お母さんの言った「コップ」という言葉が、容器をさしているのか、容器の中にある内容物を指しているのかは、子供にとって明確ではない。父親が長期出張で家を留守にした際、母親が父親の写った写真を指して「パパよ」と教えたところ、子供が写真のことを「パパ」と呼んでいたという例が紹介されているが、指差し（もしくは言葉による指示）だけで具体的に何を指しているかを判断することは、知識を持たない子供にとってはあまりに多くの解釈の可能性を含んでいる。

また、ミルクの入ったコップを指して「これがコップよ」と言われた場合、容器の名前が「コップ」だとわかったとしても、歯磨きをするときに使うコップも、同じ「コップ」というカテゴリーに入るという理解できるとは限らず、また子供が使うようなプラスチックのコップとアメリカ人が使うような巨大なマグカップを同じものとして認識する可能性もある。

本書の説明によると、そこには当然ながら様々な試行錯誤が存在する。

音声から単語として区切られた言葉は、最初は状況の中で理解されるそうである。従って、食事の時に使うコップはコップであっても、歯磨きの時に使うコップは別のものであるとして認識することがある。しかし、生活の中で取っ手の付いた容器、例えばスープに使う浅めのカップや、コーヒーを飲むときに使う深いカップ、ビールを飲むときに使うビールジョッキなど、様々な同形のものに接する中で、どこまでがコップでどこからがコップに含まれないかを探さようになるそうである。これは、今まで食事や歯磨きなどのように状況の中で覚えてきた単語を、状況から切り離し「コップ」と名付けた対象そのものを分類することで、「コップ」という単語の意味として理解できるようになるとしている。つまりどのような差異で「コップ」が表す範囲を決めればよいかを、大人の言葉の使い方を観察し、試行錯誤しながら「コップ」の意味を探している（一般化している）ことになる。このような試行錯誤は数か月間続き、2歳ごろまでにはそのような間違いは減ると言われている。

またこの試行錯誤の段階で、様々な傾向があることが指摘されている。特に興味を引いたのが、単

語を見つける際（身の回りの事象に名前があることを学ぶ際）、動きよりも、物に注意が行きやすく、知らない言葉を聞いた時、それは動作の名前と思わずに、まず物の名前だと思ふ傾向がある点である。例えば、バスを待っていて「あ、来た！」と大人が指さした場合、バスが「来た」という名前だと勘違いすることも往々にしてあるということになる。また同じカテゴリーに属するものと、異なるカテゴリーに属する者の線引きをどこで見出すかは、色や大きさではなく、形状により区別することが、本書の実験の結果から明らかになっている。これらの事実を踏まえると、境界が明確で個性のある、形が明確なものに目が行きやすく、形のない動きや色などは視覚的に具体的な形として捉えにくいのではないかと考えることができ、さらにこれは名詞、動詞、形容詞といった品詞のカテゴリーと類似しているということができる。

このように類似性の発見を通して、子供は大量の単語を分類し、体系づけながら覚えていくことになる。初めて聞く言葉の意味を既知している他の単語から推測し、その言葉と類似する言葉をどの範囲まで使うことができるのか、ほかの言葉では使えないのか（例えばどこまでを「コップ」と呼ぶことができ、どこからの容器を「コップ」とは呼べないのか）を学び、「コップ」という単語の意味を理解していくことになる。

続いて本書の中では個性を持つ名詞に続き、動詞、位置関係など空間に関わる単語の獲得についても、興味深い実験結果を紹介している。動詞の場合、名詞のように形がはっきりしたものではないため、名詞とはまた異なる試行錯誤のプロセスがある。

本書ではdrinkの例が使われており、日本語の場合「飲む」ことができる対象が、コーヒーや水、お茶だけでなく、薬を「飲んだ」り、唾を「飲む」こともある。しかし英語のdrinkはスープには使えず、薬もtakeかswallowを使う。そうすると、「飲む」とdrinkは違う意味を持つ動詞になり、「飲む」が比較的広い範囲で使えるのに対して、drinkは比較的狭く、液体の時に使うことはできるが、スープなどのように咀嚼しなければいけないものは、eatを使わなくてはならない。このような動詞の使用範囲も、生まれてすぐのころから理解できるわけではなく、色々な事例に当たりながら、「飲む」の表す範囲を類推しながら、理解していくことになる。ただし、いったんその意味範囲を表す区別の仕方が身についてしまうとその区別に対して無自覚になるため、あたかも生得的に見えてしまうことがある。

このように、動詞は、特に日本語の場合は、目的語（動作の対象になるものがないか）や助詞が大きな役割を果たすと考えられている。ただし、ある動きに名前があることが分かっても、その動詞を別の状況でも正しく使えなければ、「言葉の意味」を理解したとはいえない。意味を理解するためには、自分の母語が様々な動作をどのような基準で区別しているのかを学習する必要がある。つまり、動詞単体で意味が理解できるわけではなく、類似した意味の動作との類似性と差異を知って、それらの動詞との意味的關係を理解して初めて、その動詞を正しく使えるようになる。

このような人間の言語獲得のプロセスには、発見、創造、修正のプロセスがある。単語の意味を理解するプロセスに共通していることは、蓄積（記憶した）単語から類似性を探し出し、どの単語とどの単語が同じカテゴリーに属するのか、またどの単語が異なるカテゴリーに属するかを、大人がどのように言葉を使っているかをもとに、単語の「意味」を理解する。このように、規則性を見出し、規則を応用しながら、新しい概念を表す言葉を創造することで理解した規則性の正確さを試し、時には

大人の使い方を観察しながら規則を修正し、言語システムを身につけていく過程は、科学的考察と類似していることが、最後のセクションで説明されている。個人的には、この言語を獲得することで思考方法を身につけることが、科学者が物事の類似性をもとにモデルを作り理論を組み立てることと類似しているという部分の説明は、本書の中で最も興味深かった。

言語と思考の関連について、これまで人類学的に論じられることはあるものの、実際の言語を用いた実験の結果から、その関連性を導き出したものはあまり多くなかった。区別や差異といった用語はソシュールの時代から論じられ、単語（記号）はそれ自体では意味をなさず、他の単語（記号）との意味の違いから、具体的な意味（もしくは意味範囲）が示されることは指摘されてきた（メルロ＝ポンティ『意識と言語の獲得』参照）。研究者が漠然と理解してきたこれらのことを、実験結果を通して示し、科学や学問のような高度な思考が、実は言葉の学習の延長線上に存在するものだという事実を明確に示した点においても、本書は一読に値すると思われる。本書の知見をもとに、これらの傾向が言語にどのような形で表れているかを明らかにすることも、言語研究上重要であり、ここから得られた知見を外国語教育にどのように活かしていくかも重要な課題であると思われる。

5. 河村茂雄・武蔵由佳・荻間澤勇人・水谷明弘著『組織で支え合う！学級担任のいじめ対策』

出版社：図書文化社 2016年 93ページ ISBN:978-4-8100-6677-7

学校でのいじめ問題が深刻化している。文部科学省（2017）によると、いじめの発生認知件数は減少傾向にあったが、2015年度より増加傾向に転じ、2016年度では過去最多の発生認知件数になったことを報告している。いじめ問題に対してはこれまでも、いじめ防止対策推進法（文部科学省、2013）の公布や、道徳教育の重要性が指摘される（教育再生実行会議、2013）など、国としてもいじめ防止を意図した対策を提言している。それらを受けて、学校現場では様々な対応が実施されてきたと推察される。その一方で、文部科学省（2017）の調査結果に鑑みると、その対応に苦慮している現状もあることが予想される。

このような現状を受けて、本書では、「校内組織」、「質問紙調査の活用」、「学級集団環境」に着目し、いじめ対策について論じられている。具体的な構成は次の通りである。

第1章 いじめ対策はトータルな取組みである

第2章 校内組織のチェックポイント

第3章 早期発見のチェックポイント

第4章 いじめを生まない環境づくりのチェックポイント

以下、各章について紹介する。

第1章では、教師はいじめに気がつきにくく、その理由として「実際に気がつかない」、「見てもいじめと認識ができない」場合があることを指摘している。そのため、いじめ対策の前提として学校内の教職員間で、「いじめの解釈は複数の者で組織的に行う」、「初期対応から校内組織のリードのもとで行う」ことを共通理解する必要があるとしている。

この前提を踏まえた上で、早期発見・早期対応の手がかりとしやすい、いじめの様態について「人

間関係の軋轢」タイプ、「遊び」タイプ、「非行」タイプに着目し、それぞれの特徴について解説している。

・「人間関係の軋轢」タイプ

原因・実態…学校生活における人間関係の摩擦

被害を受けやすい子ども…同じ相手と繰り返シトラブルが生じている子どもなど

・「遊び」タイプ

原因・実態…「嫌なあだ名で呼ぶ」など、からかいが発端となることが多い

被害を受けやすい子ども…複数の子どもにからかわれている、グループ内で使い走りのようになっている子ども

・「非行」タイプ

原因・実態…暴力や恐喝、徹底した仲間外しなど

被害を受けやすい子ども…グループ内で限度を超えた悪ふざけを受けている子どもなど

そして、いじめ対策を実施する上で、「校内組織の取組み」、「早期発見の取組み」、「いじめを生まない環境づくり」がポイントであり、これらの骨子は以下の通りである。

「校内組織の取組み」

- ・子ども個人と学級集団の状態をアセスメントするための共通指標を設定する
- ・学級経営の目的やその方法論、子どもへの対応の原則を教職員全体で共有する
- ・気になる子どもの状況、学級集団づくりの取り組み方について、学年団などで定期的に話す

「早期発見の取組み」

- ・子どもの行動観察はみるべきポイントを定めておく
- ・定期的な個別面接や、気になる子どもと意図的な会話を行う
- ・質問紙調査を定期的実施する

「いじめを生まない環境づくり」

- ・学級集団を規律と親和的な雰囲気のある集団に育成する
- ・学級集団の状態を把握して、いじめに対して先手を打つ
- ・いじめの様態、加害者、被害者の心理についての心理教育を定期的に行う

これらの詳細について、第2章から第4章で紹介している。なお、以下では各章の骨子のみを紹介することとする。

第2章では、校内組織の取組みとして、「学級担任の取組み」、「学級担任を支える取組み」、「教職員の人間関係作り」、「教職員研修の必要性」が重要であることを指摘している。また、いじめと疑われる事象が報告された場合、「いじめかどうかの仮判断」、「事実確認のための聞き取り」、「被害者の安全

確保と情報提供者の保護」、「加害者及び学年・学級集団への継続的な指導」が組織的対応の基本的な流れとなると紹介している。なお、いじめの解決では、事実関係を調査し、被害者と加害者、双方の保護者に、学校が毅然として、公平かつ公正に一貫性をもった態度でいじめの解決に取り組んでいることを理解してもらうことが重要であると指摘している。

第3章では、早期発見の取組みとして、質問紙調査(Q-U)を用いた方法を紹介している。その内容として、まず、いじめ被害を問う質問項目に対する子どもの回答を確認することが前提になると指摘している。その上で、学校不適応が疑われる子どもの回答結果の詳細を確認し、なるべく早めに個別面接を実施し、面接では気になる点などの情報収集だけではなく、子どもの承認感を高めるようなメッセージを送ることが重要であるとしている。またこの他にも、質問紙調査の結果の活用方法について、学級担任、学年、学校全体、ごとに紹介している。

第4章では、いじめを生まない環境づくりとして、規律と親和的な雰囲気のある学級集団では、いじめの発生率が低いため、このような学級手段の育成が求められると指摘している。その一方で、規律が重視されている学級集団では「学級内の地位が低く見られている子どもがいじめ被害者になる可能性がある」、親和的な雰囲気が重視されている学級集団では「仲が良さそうに見える小グループ内で、特定の子どもが他の子どもから継続的にいじめられている」、「小グループのリーダー的な子どもが、他のグループの子どもから攻撃されている」といった注意点を示している。さらに、規律も親和的な雰囲気もあまりない学級集団では、「いじめのターゲットが次々と変わる関係性攻撃のいじめ」が起りやすいため、抜本的な解決策が必要であると指摘している。その上で、心理教育を実施する上でのポイントを紹介している。

いじめの様態として、暴力や悪口を言うなどの気がつきやすいものもあれば、SNSなどインターネット上での攻撃など、いじめを発見することが難しいものがあるだろう。そのような状況の中で、いじめ対策を学級担任一人で行うことには限界があり、学校組織対応が求められていることを本書は示唆している。本稿では紹介できなかったが、本書の各章にはより具体的ないじめ対策のあり方が紹介されており、示唆に富んだ内容となっているため、一読することをお勧めしたい。

引用文献

教育再生実行会議(2013). いじめの問題等への対応について(第一次提言)

〈https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/pdf/dai1_1.pdf〉(2018年9月15日)

文部科学省(2013). いじめ防止対策推進法の公布について(通知)

〈http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1337219.htm〉(2018年9月15日)

文部科学省(2017). 平成28年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」結果(速報値について)

〈http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/10/1397646.htm〉(2018年9月15日)

